

Max Weber の「価値自由」と「価値関係づけ」

— 「価値への自由」のテキストへの帰属 —

王子総合病院附属看護専門学校 坂 敏宏

1 目的

この報告の目的は、Max Weber の「価値自由」が「価値からの自由」と「価値への自由」の両側面をもっているとする従来の解釈（例えば折原 2003）にたいして、Weber のテキストにのっとるかぎり、それは「価値への自由」を含意するものではなく、むしろ Weber の実践的立場の表現としての「価値への自由」は、Weber による「価値関係づけ」の概念に帰属されるべきことを示すことである。

2 方法

まず背景について述べる。Weber は、実践において自分の理想を擁護すべきことを強調していた (Weber 1988: 155)。これが「価値への自由」として、「価値自由」の含意とみなされてきた。だが、坂 (2014) によれば、Weber の価値自由の概念は、社会科学の過程それ自体は価値評価的な指標に基礎づけられず、その言明において価値評価を交えることはできないということの意味する。価値自由とは、社会的出来事についての「科学的説明の原理」にほかならない。これを前提するかぎり、価値自由は「価値からの自由」を意味しているとしても、「価値への自由」を意味するとみなすことはできない。しかし、Weber による「価値への自由」の強調をかんがみるに、「価値への自由」が価値自由の概念から逸脱しているとしてこれを安易に放棄することもできない。むしろ、「価値への自由」という Weber 解釈の意義を Weber 本人のテキストにいかにして関連づけることができるかが課題となる。

そこで、まず「価値への自由」の意味内容を再確認する。そのうえで、これと Weber との関係について、Weber のテキストにおける、社会科学的認識において認識主体の価値関心にもとづいてその対象を同定すべき「素材選択の原理」である「価値関係づけ (Wertbeziehung)」の概念に着目する。これを元来の趣旨を損なわない範囲内で実践一般にかんする概念として解釈しなおして、これを「価値への自由」の考え方の帰属先とみなすことがふさわしいことを論じる。

3 結果および考察

その結果、「価値への自由」は、もともと科学的認識において対象を自由に選び取る「価値観点への自由」を意味していたという点で、これはまさに Weber の「価値関係づけ」へと帰属されるべき概念だといえることが分かった。さらに、Weber は「価値関係づけ」を科学的認識における「具体的対象についての現実の価値判断」であるとみなしているが (Weber 1988: 252)、科学的認識もまた生における行為実践の一局面であることを考慮するとき、科学的認識に限定されている「価値関係づけ」のその限定を解除して、これを実践一般についての概念として解釈しなおせば、「価値への自由」は、これを価値自由よりもむしろ整合的に「価値関係づけ」へと関連づけ、帰属させることができる。

4 結論

以上から、Weber の「真の価値自由」の一側面とされてきた「価値への自由」という考え方は、価値自由の概念よりもむしろ「価値関係づけ」の概念に帰属されるべきだという仮説が定立された。

文献

- 折原浩, 2003, 「解説」富永祐治ほか訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波書店。
坂敏宏, 2014, 「Max Weber の「価値自由」の科学論的意義」『社会学評論』65(2): 270-86。
Weber, Max, 1988, *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, 7. Aufl., Tübingen: J.C.B. Mohr.